INTERVIEW

夢や希望、癒しを込めて絵を描き続けたい

夢ら丘 実果さん

画家・絵本作家・チェコ平和芸術親善大使
夢ら丘　実果（むらおか　みか）

プロフィール

都立芸術高等学校に於いて芸術を、青山学院大学に於いては教育学を学び、英会話講師等を経た後、1993年より画家として活動開始。絵本、挿し絵等を手がける他、2007年、タイ国王陛下御生誕80周年記念メモリアルポストカード原画を制作する等多岐にわたり活躍。全国の百貨店、ホテルの他、ロンドン、パリ、ボローニャ、ニューヨーク等の世界主要都市にて展示会を開催。「Heart Art in TOKYO 2008」第11回エイズチャリティー美術展にて、東京都医師会賞を受賞。花が咲き香るガーデンの絵を中心に、猫の作品等を制作している。

「癒しの画家」として活躍される夢ら丘さんは、花が咲き香るガーデンの絵を描くことをライフワークとしている。

さらに、幼い頃からの自身の体験を基に絵本を出版し、自ら学校や病院に赴き、読み聞かせに取り組んでいる。直接語りかけることで、子どもたちがより深く作品に込めた気持ちを理解してくれたらという思いから始め、人々の心に生きる希望、勇気を訴えかけてきた。

他にも友人である女優の石井めぐみさんやテノール、ソプラノ歌手の方々と共に、「音楽と絵本の朗読コンサート」を行うなど、幅広い活動を行っている。

「都立高校で物理教師をしていた父、田園調布雙葉学園で養護教諭をしていた母のもと、大きな愛情を受け、時には厳しく、そして前向きに生きる気持ちを持つよう育てられた」と語る夢ら丘さんご自身も、現在中学3年のお嬢様を持つ母親でもある。

一言ひとこと優しく話す姿。人々はこの優しさに包まれ、夢ら丘さんの込める想いが、心に響いているのだろう。

癒しの画家と呼ばれて

――「Heart Art in TOKYO 2008」のエイズチャリティー美術展におきまして、東京都医師会賞を受賞され、おめでとうございます。

夢ら丘　私も驚いています。一人でも多くの方にエイズの問題に関心や理解を持っていただきたい、そして私の絵が少しでもそのお役に立つことができればという思いで出品させていただきました。

――現在、幅広くご活躍されていますが、画家としての道を歩むようになったきっかけは何でしょうか。

夢ら丘　私は小さい頃から喘息で、発作を起こすと母の勤務先の保健室で絵を描いて、とても楽しそうに過ごしていたそうです。小学校に入学すると、学校と病院を往復する生活だったのですが、白い病院の壁をキャンバスに見立てて絵を描いていました。絵本を読むのがとても楽しくて、私もいつかこういう絵を描きたい、みんなが楽しめる絵本を作りたいと考えるようになっていったんです。

――夢ら丘さんの絵を見ていると、とても心が和みますね。絵は専門に学ばれたのですか？

夢ら丘　絵の専門的な知識を得たのは都立の芸術高校でした。美術系の高校があることを教えてくれたのは母親です。その導きがなかったら、私はこの道に進むことができなかったと思います。小学校の頃から、いろいろな展示会に連れて行ってくれたり、家の中にも画集や絵本がたくさんありました。小さいうちからいろいろな作品に触れ、早い段階で専門的な絵の勉強ができたのは、自分の描きたいモチーフやテーマを見つける上で、とてもプラスになっていると思います。

――「癒しの画家」と呼ばれるようになったのは、どうしてだと思われますか。

夢ら丘　イングリッシュガーデンの絵を観てくださった方が、「本当にお庭に来たようだ」「花の香りまでも感じるくらい」などと言ってくださいます。絵を観る人に、花の香りを感じ、日の光を浴びているような安らぎを感じてもらって、癒され、優しい気持ちになってくれたらという思いを込めて描いていますので、私のその想いが伝わり、癒しを感じていただけるのかと思い、とても感謝しています。

――庭の絵には猫が描かれていますね。

夢ら丘　庭は、時間と労力をたっぷりかけて作られた愛情の結晶だと思うんです。その庭の中で一番居心地のいい場所を見つけて気ままに過ごす猫は、自由と平和と希望の象徴だと思っています。

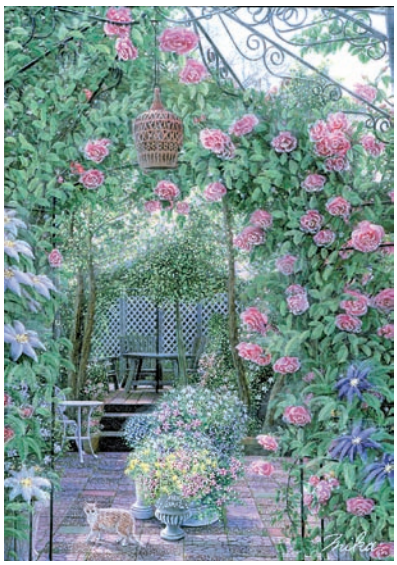
――絵は実際にご覧になって描かれるのですか？ それとも、ご想像でしょうか。

夢ら丘　イギリスのイングリッシュガーデンが大好きで、何度も訪れ、そこで描いてきますが、ここにこんなお花があったらいいなとか、仔猫がこんな表情をしてここに寝ていたらかわいいだろうとか、そんなことを考えながら描いていくので、ファンタジーガーデンなんですよね。

画集『そよ風に誘われて』(愛育社) ¥1,800(税抜)
バラ、クレマチス、コスモスなど、四季折々の花が咲き香るイングリッシュガーデンの画集。日英友好の架け橋となっている英国の詩人、『窓際のトットちゃん』の翻訳者ドロシー・プリトンさん(バウチャー卿夫人)が翻訳や帯の推薦文に協力。可愛い猫たちが訪れるガーデンの絵は、見る人に、安らぎを与えてくれる。

『紫陽花の咲く季節』～Hydrangea in Full Bloom～

『コーラルクラスターの中庭』～ Garden of 'Coral Cluster' Roses ～


『お気に入りのテラス』～ My Favorite Terrace ～
好評の猫がたたずむガーデンの絵シリーズ

――画集を出版されたり、展示会も開催されているそうですが、その活動についてお聞かせください。

夢ら丘　活動の柱としている『猫がたたずむイングリッシュガーデン』の絵は、百貨店やホテルの美術画廊で展示する機会をいただいています。ここ数年は、軽井沢プリンスホテルで行われる展示会で、たくさんの方々に見ていただいています。昨年は、日本最大のバラのフェスティバルである「国際バラとガーデニングショー」で、テーマが「アート・ドゥ・ヴィーヴル（アートな暮らし）」ということもあって、私のガーデンの原画と画集が紹介されて、多くの方々と交流させていただきました。さまざまなすばらしいイングリッシュガーデンを実際に見ることができたので、私自身もとても勉強になりました。

――世界でもご活躍されているそうですね。

夢ら丘　3月にザルツブルクで行われたイースター音楽祭は、小澤征爾氏とベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のサイモン・ラトル氏が指揮をすることで話題になりましたが、その際に私の絵が展示されました。5月中旬には、チェコのプラハの国立美術館ベルトゥルジュニー宮殿で、絵を展示させていただくことになっており、チェコの平和芸術親善大使に就任する予定です。

絵本に想いを込めて

――絵だけではなく、絵本も描かれていますが、そのきっかけは何でしょうか？

夢ら丘　『ぜんそくさん、ありがとう』という絵本を出版していますが、一番大きなきっかけは、私自身が喘息だったことだと思います。私は喘息が原因でいじめられたり、つらい経験をしたことが多かったのですが、たくさんの方々の支えと助けによって、自分の好きな道を見つけて、夢を実現させることができたんですね。ですから、病気や障がいを抱えながら学校に通う子どもたちやたくさんの困難を抱えて過ごしている方々に、絵本を通して夢や希望をお届けしたいと考えました。病気や障がいは、生きていく上ではハンディかもしれませんが、それを敵ではなくて友達として受け入れて、上手につきあうことで、物事を前向きに考える力や困難を克服して夢を実現させようとする力など、良い力をもらえるということをお伝えできればと思っています。

――病気や障がいをもつ子どもを抱えている親にとっては、とても心の支えになりますね。

『ルピナスの咲く丘』～ Garden with Lupines ～

夢ら丘　そうだと思いますね。今まで病気や障がいについて考える機会のなかった方からも、「世の中には目には見えなくてもさまざまな困難を抱える人がいることを常に意識しながら、優しい目を持って生活したい」というお便りをいただきました。

――最新作『カーくんと森のなかまたち』の絵本は、どのような想いを込めて作られたのでしょうか。

夢ら丘　私の親しい友人が自ら命を絶ったという経験や、自分が交通事故にあって立ち直った経験を基にして、落ち込んでいる方々が元気になるお手伝いができればと思って制作しました。昨年は、自殺対策基本法に基づき、自殺予防週間が9月に実施されました。自殺の原因のほぼ100％といわれる（WHO調査による）精神疾患（うつ病など）の対策になり、一人でも多くの命を救うことができればという想いで、「日本いのちの電話連盟」の斉藤友紀雄常務理事と、厚生労働省科学研究班の主任研究者であり、東海大学医学部の保坂隆教授（精神医学）に協力していただき、出版をしました。

――『カーくんと森のなかまたち』の文章は、吉沢さんという方

学校での『カーくんと森のなかまたち』読み聞かせシーン

が書かれているのですね。

夢ら丘　私が原作を考えたのですが、吉沢さんには喘息の絵本にも協力していただいています。世界各国を回り、一貫して社会貢献活動をされていて、増加する子どものうつの問題を何とかしなければと意気投合し、完成した絵本です。「いのちの授業」に取り組まれている聖路加国際病院の日野原重明先生にもご協力いただきました。

――経験が基になって作られたという意味では、とても思い入れが深い絵本になりますね。

夢ら丘　この絵本は、自分には価値が無いと思い込み、絶望的になっていたホシガラスのカーくんが、優しいシロフクロウのホー先生や友達の鳥のみんなに支えられ、自分の良さや周囲の愛に気づいて、次第に元気を取り戻していく、という物語です。最近は、若いOLやお父様、お母様、孤独になりがちなご高齢の方々からも、「絵本を読んで元気になりました」「自分にも良いところがあると、少し自信が持てました」「友達の欠点を非難するのではなく、良いところを見つけて伝えたい」などという感想がたくさん届きます。絵本を読むことは、親子で一緒に考えたり、会話をする機会にもなります。幼い頃に読んだ絵本でも、大人になってから読んでみると、また違った感動が得られたりするものなので、幅広い年齢層の方々に絵本に親しんでいただきたいですね。

読み聞かせを通じて

――読み聞かせを始められたきっかけは何でしょうか。

夢ら丘　絵本を描くだけでは、なかなか作家の思いは伝わりません。そこで、実際に私が直接関わった子どもたちが抱える問題を解決して、前向きに強く生きてほしいという想いから始めました。

――読み聞かせをする際に、心がけていることはありますか。

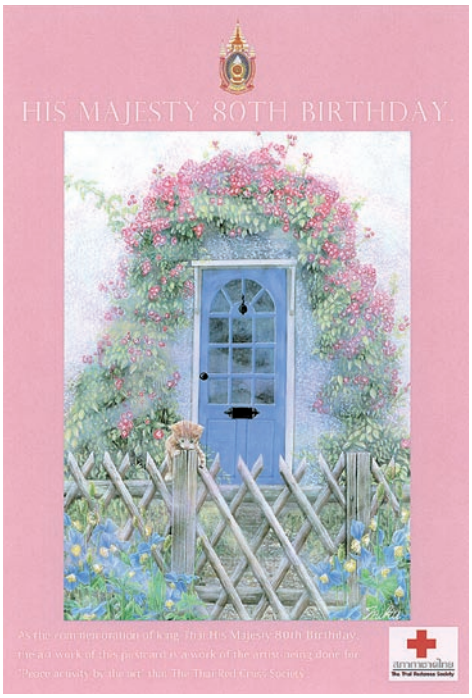
夢ら丘　絵本の内容を十分に子どもたちが理解できるように、じっくり感情を込めて朗読するようにしています。また、授業の流れを決める際、担任の先生と話し合って、子どもたちが自分自身で考えられるように、意見交換や感想文の作成、発表にたっぷり時間があてられるように工夫しています。

――自らの足を教育現場に運んで読み聞かせをされていますが、子どもたちを救いたい、強く生きてほしいという強い意志がないとできないのではないかと思います。

夢ら丘　学校で読み聞かせをさせていただくと、実際に子どもたちがそこから深く考え、真剣に自分と照らし合わせて物事を考えて生きていく上でのヒントをたくさん見つけているのを実感します。とてもうれしいことです。『ぜんそくさん、ありがとう』は、先生方からは「夢の実現のために努力する強い心を育む上で、とても役立っています」「みんな自分のことで精一杯な時代ですが、周囲に対する感謝の心や、病気や障がいを持った人に対する思いやりの心を育むための教材として活用しています」という意見をいただきます。『カーくんと森のなかまたち』

『カーくんと森のなかまたち』（ワイズ・アウル社）￥1、500（税抜）
自信を失い、悩むホシガラスのカーくんが、友達に支えられて元気を取り戻していく、命の大切さを伝える絵本。聖路加国際病院の日野原重明名誉院長が推薦。幅広い層の読者から「元気になった」「癒された」と感想が届く。

『ぜんそくさん、ありがとう』（愛育社）￥1、600（税抜）
病気を乗り越え、両親や周りの皆に支えられ夢を実現させる少女のサクセスストーリー。喘息を乗り越えたスピードスケートオリンピック金メダリスト清水宏保選手が推薦。英訳もあり、海外でも活用されている。巻末には喘息についての解説が絵入りで入っている。



「ブルー・ボピーに魅せられて」
タイ国王陛下御生誕80周年記念・メモリアルポストカード。大人から子どもまで、人々の心に平安と癒しをもたらし、中立・平和を基本に活動する画家として評価を得た。

は、「子どもたちは、カーくんを思う先生や友達の気持ちに触れ、自分が周囲から愛された大切な存在であること、人はひとりでは生きていくことが出来ず、支え合い、助け合い生きていくこと等を考えています」というお話をいただきます。病気や障がい、いじめ等の問題や、ひとりひとりの尊い命について深く考えることがなかった子どもたちにとって、気づくことが多いようで、先生方も、「読み聞かせをしてもらってとても良かった。得たものは大きいです」と語って喜んでくださるので、私の方が元気にさせていただいていて、本当に感謝しています。

――夢ら丘さんは、絵本の読み聞かせを、5月に埼玉県志木市で行われる「心の安全週間」、杉並区で行われる「いのちの教育月間」でされるとうかがっています。どのような経緯で啓発活動に加わることになったのでしょうか。

夢ら丘　先ほどお話した保坂教授によると、5月には自ら命を絶つ人が増える傾向にあり、5月にうつ予防対策の啓発活動をすることで、かなりの予防効果が期待できるということなんです。そこで、志木市をモデルとして、「心の安全週間」を実施することが決まり、志木市の教育委員会から、自他の命を大切にする心を育む道徳の授業を、絵本『カーくんと森のなかまたち』を取り入れて行ってほしいという依頼がありました。「いのちの電話連盟」の斉藤常務理事とご一緒に、ゲストティーチャーとして授業をさせていただくことになっています。

　杉並区でも5月に自殺予防対策啓発活動が行われ、この1年間で教育委員会の指導のもと、区内のすべての小中学校で、「命を大切にする、心を育む」公開の道徳授業と体験活動を実施するという計画があります。私も道徳授業を行う講師として紹介され、絵本『カーくんと森のなかまたち』は、教育委員会の薦めで命について考える本として活用される予定です。

　また、この絵本を活用した道徳授業の進め方について、校長先生方が協力して指導案をまとめてくださり、この資料をもとに、杉並区、志木市等をはじめとする各自治体の小中学校で絵本を活用していただくことになっています。

――この活動を通じて人々に伝えたいことは、何でしょうか。

夢ら丘　中学生では4人に1人、小学校の高学年では10人に1人がうつ状態という報告があります。私が読み聞かせに行く学校では、友達関係、学校のこと、家庭の問題、その他いろいろな問題が複雑に絡み合って、悩みを抱えている子どもたちがたくさんいます。大人たちは、忙しさのあまり子どもが発しているサインを見落としてしまうという危険が多いと思うんですね。小さい頃からどんなことでも話していいんだよという信頼関係を培って、悩みを打ち明けてくれた時には、それを受け入れてあげることがとても重要だと思っています。また、先生方やご両親だけでなく、地域社会で声をかけあって、共に子育てをしていくという意識がとても重要になってくると思うんです。皆さんが、周囲に元気のない方を見つけたら優しく声をかけて、話を聞いていくということがとても大事だということに気づき、それを習慣としていただくきっかけになればいいなと思っています。

人生に影響を与えた学び

――青山学院での思い出をお聞かせください。

夢ら丘　私は高校の時に芸術学の授業で、ケネスクラースの『Civilization（芸術論）』の本を読んだことがきっかけで、英語に対する関心が高まり、もっと英語を学びたい、英語の教師になりたいという気持ちで青山学院大学の文学部教育学科に入りましたが、入

学直後から喘息で入退院を繰り返すことも多く、将来英語に関わる仕事に就けるのかととても悩んでいた時がありました。その時に教育心理学の先生から、「君は絵の才能があるから、それを活かした仕事をすることによって、子どもたちの心にさまざまな種をまいて育てたり、多くの人々にメッセージを伝えることができる」と励まされた言葉が心の奥底でずっと響いていたんです。結果的には、それが私の人生にとても大きな影響を与えることになりました。

さらに、在学中に友人と一緒に行った三鷹の教会で、深町正信院長先生がお説教で話された「障がいがあってもそれを乗り越えて、みんなに支えられながら夢を達成した方」のお話にとても勇気づけられました。深く印象に残っています。

私が院長先生はじめ大学の先生方から教えていただいたことは、常に隣人の幸せを願い、受けるより与える方が幸せであるということです。さらに、愛と喜びと平和を大事にする心を持ち、常に周囲に感謝しつつ、謙虚に、自制心と辛抱強さとともに強く生きていくことのすばらしさなどです。

青山学院で学んでいる皆さんは、私が出会ったようなすばらしい先生方から、学院でしか得ることのできない貴重な教育体験をしていると思います。

THE DAILY YOMIURI FRIDAY, NOVEMBER 10, 2006 3

NATIONAL

IN THE NEWS

Children with asthma given words of hope

By Kazuo Otsu
Yomiuri Shimbun Staff Writer

Picture book writer Mika Muraoka hopes her new book will cheer up children suffering from asthma. Hoping young asthma sufferers can learn to live with the condition and lead a positive life, she titled the book, "Thank You Mr. Asthma: Mikako's Colors of the Stars."

The main character is a primary schoolgirl, Mikako, who has asthma. The story starts with boys mocking Mikako, saying, "Hurry up, hurry up Asthma girl!"

Mikako goes to a hospital regularly and cannot play with friends. Although one of her friends dies from an asthmatic attack, she confronts the disease and keeps a positive attitude, holding on to her dreams and encouraged by doctors and family—she likes painting pictures.

The story is based on Muraoka's own experiences. She has had asthma since she was 2 years old and was often forced to stay home from school. As a high school student, she once passed out from an attack. She grew pessimistic about the future, thinking she would never love someone, let alone marry.

She still has to take medication for her asthma, but she is married, has a daughter and has realized her dream of becoming a painter.

As the number of children suffering from asthma has doubled in the last 10 years, she wanted to write a book on the condition.

Encouraged by an understanding editor, she achieved her goal with her seventh book.

After its publication, she was invited by schools and hospitals to give readings.

Muraoka has received responses, including one from a child asthma sufferer, who called the condition "a giant Satan," but who has gradually come to accept it, calling it Mr. Asthma. Other letters from young asthmatics mention efforts to realize their dreams.

Muraoka now feels that her book has been helpful in raising hopes in the minds of asthma patients.

The Yomiuri Shimbun

Mika Muraoka displays her book in her studio.

THE DAILY YOMIURI　三面記事

あなたがいてよかった

人語り

産経新聞社会面「人語り」

朝小学生新聞

いいところ 誰にでもある

毎日小学生新聞
一面記事

――青山学院の在校生、若者へメッセージをお願いいたします。

夢ら丘　学生だからこそ出会えるさまざまな人たちとの交流を通じて、幅広い知識を得て、多くの体験をしてほしいですね。そして、自分を洞察する中で、取り組むべきことは何かということを深く考えることも貴重な特権ですから、大いに考えて、悩んで、行動してほしいと思っています。このすばらしい青山学院の先生方、友人の方々とご一緒に、自分の好きな道を見いだして、自分の夢を達成させてほしいと願っています。

――これからの抱負をお聞かせください。

夢ら丘　私は、学院の先生方、私を支えてくださる医師や医療スタッフ、友人、絵を描く楽しさを教え導いて応援してくれた両親、仕事に対する理解をもって接してくれる家族など、本当にたくさんの皆さんのおかげで、今こうして画家として活動させていただいています。これからも「イングリッシュガーデン」の絵はライフワークにしていきたいと思っていますし、『ぜんそくさん、ありがとう』や『カーくんと森のなかまたち』などの絵本の読み聞かせも続けていきたいと思っています。絵や絵本を観る人たちが心の平安や癒しを得て、夢を感じて、あたたかい気持ちになって、元気になってくれるような絵を描き続けてゆきたいと思っています。

――これからも、夢ら丘さんの作品を通して、癒され、夢を持つ人々が増えていくことを願っています。ぜひ青山学院でも絵本の読み聞かせを実践していただきたいですね。

これからのご活躍を楽しみにしています。本日は、ありがとうございました。

（2008年4月21日青山学院にて）

インタビュー・文　本部広報室